

自然を知る

平賀壯太

世の中には、毛虫やイモムシやクモを嫌いな人が多いですが、なぜそんなに皆が嫌うのでしょうか。不思議ですね。本人は全く忘れてしまっても親が虫を見て、悲鳴を上げたり、顔をしかめたり、「殺虫剤、殺虫剤」と大騒ぎした幼児期の体験が原因となった精神的外傷（トラウマ）かも知れません。こういうトラウマが親から子へと次々と伝達されているのではないのでしょうか。どのようにしたらこのようなトラウマを治せるのか私にはわかりませんが、庭のサンショウの木にいるアゲハチョウの幼虫を子供といっしょに楽しく観察したりすることができると思います。少なくとも教育に携わる人は、自分のこのようなトラウマを治しておきたいものです。

しばしば「自然の豊かさが失われたから、子供達の自然離れが起っている」と言われています。少しは関係があるかも知れませんが、このことだけが原因とは考えられないと思います。東京の中心部で育った昆虫少年もいますし、豊かな自然の中で育っても必ずしも昆虫少年になるとは限りません。もちろん、豊かな自然環境を守ることは大切ですが、子供達が生物を観察研究しようという意欲を持つようになるためには、他の要因が必要だと思っています。子供を取り巻く他の要因、すなわち親、兄弟、友達、学校の先生等の人的環境です。むしろこちらのほうの影響が大きいのかも知れません。子供には教育が大切ですが、それはなにも学校教育だけとは限りません。家庭における教育も大切だと思います。

人の命の大切さを教えるために「人の命は地球より重い」などと非科学的なことを言う人がよくいます。また、他の生物も大切にすることを教えるために「全ての生きものには、魂があるから殺してはならない」などという言葉もし

ばしば耳にします。

このような観念的な生命観を学校で教えるのは如何なものでしょうか。生物の「生命」や「死」なら科学的に言葉で説明することが出来ます。しかし、生き物の魂や霊魂をどんなものだと考えているのでしょうか。また、いくら「たとえ」だと言っても「人の命は地球より重い」などということは、あまりにも可笑しい「たとえ」です。そんなに重たい人間がたくさん棲んでいては、地球の自転が狂ってしまうことでしょう。また、人間の命と他の生きものの命の重さは同じと言うのなら、極端な例ですが、大腸菌 O157 にも生命はありますから、子供に感染している何億という大腸菌 O157 を殺さずに、子供一人が死ぬのを待てと言うことになります。ナンセンスですね。私達人間が人間の生命を他の生物より優先するのは当たり前のことです。しかし、ものの価値と言うものは、何を基準にするかで変わるものです。他の生物から見た場合には、人間は最も害のある生物であり、地球に居てもらいたくない“害獣”のナンバーワンでしょう。このような異なる視点からみた場合、私達が反省しなければならないことはいろいろあるものと思われまます。

御存知のように、人間を含む動物は他の生物を食べて生きており、他の生物の死に依存して、生命が維持されていると言って良いでしょう。植物だけを食べる人（ベジタリアン）できえも、生産過程で多くの動物“害虫”を殺虫剤で殺した農作物を食べているのです。そして農作物である植物さえも生命を持った生きものです。稲の穂のひと粒ひと粒が生きものです。観念的な生命観を持つ人は、このような現実を直視せずに、生物を殺すことに対して過剰なアレルギー反応を示してしまうように思えます。このアレルギー反応の結果、子供達は生物にふれるチャンスを奪われてしまいます。生きものに対する優しい思いやりの心は、生き物との付き合いの中から自然に生まれて来るものであり、観念的な言葉で教えるものではないと思っています。

尾瀬沼のように大勢人が押しかける国立公園では、動植物の採集を厳しく規制しています。しかし他の所では、特別の場合を除き、同じような規制を必ずしも必要としないのです。ましてや、里山で子供達が普通種の昆虫を捕ったりすることまで禁止しなくてよいのです。自然の持つ回復力を越えない範囲内であれば捕らまえて構わないのですから、乱獲にならないように優しく指導してや

れば済むことです。学校の先生は、国立公園の警備員（レンジャー）ではないのです。この辺の違いを混同している人をよく見かけます。自然保護に関するこのような誤解も子供達が生物に接する機会にブレーキをかけてしまうことがしばしばあります。私的なことで恐縮ですが、一つ例を上げてみましょう。

私の長男が小学生のときに、「夏の学校」に参加して山に登りました。道端の花に止まっていた大きな薄紫色の美しいチョウを息子は両手で捕まえました。それは昆虫図鑑で見たことのある憧れのアサギマダラと言うチョウだったので。興奮した息子は、「ぼく、アサギマダラを捕まえたよ！」と引率の先生に見せたのです。ところが、その先生に、「チョウを捕まえてはならない。殺すな。すぐに放してやれ」と叱られたのだそうです。息子はチョウを捕まえて先生に叱られたという苦い“体験”をして「夏の学校」から帰ってまいりました。

なんという情けない「夏の学校」なのでしょう。なぜその時先生は、「全員集合！ 平賀君がアサギマダラという面白いチョウを捕まえたよ。みんなで観察しよう」といってくれなかったのでしょうか。そして、このアサギマダラが長距離の渡りをするチョウであることを説明したあとで、チョウを空に放してやるように上手く指導して頂きたかったのです。例えばチョウの渡りを調べる方法を説明して、チョウの半透明な羽に油性ペンで息子の名前と電話番号を書き、「平賀君が捕まえたこのチョウはどこまで飛んで行くのかな。このチョウをこんど捕まえた人が、どこで捕まえたか知らせてくるのを待とうね」と皆に夢を持たせてやったらよかったと思います。

子供達が生きものに接したときの感動が大切です。生きものを捕まえた時のプリミティブな感動が、自然を知る入り口だといって良いかも知れません。魚釣りをしたことのある人なら、きっとこの感動を良く理解できるでしょう。上の例で示したように「生きものを捕るな、殺すな」ということを、強調し過ぎる教育には落とし穴があることに気付いて頂きたいと思います。これでは、昆虫採集や植物採集ができなくなるのが当たりまえです。子供達の「自然離れ」の一因はこのような学校教育にあるのかもしれない。学校教育の影響のおよんでこないところでしか、昆虫少年が育たないことになります。皮肉なことに、多数の生物を捕まえて研究したことのある人の方が、自然の大切さを深く理解

し、地球上の多様な生物種を全滅から守らなければと考えています。そして、他の多くの人達は、自然環境が破壊されて多数の生物種が絶滅へと追いやられていても、それに気付かず無関心でいるのが現状ではないでしょうか。

地球上の生物の大切さを教えるためには、観念的な生命観に基づく教育ではなく、40億年の生物進化の歴史や、多様な生物種が互いに関連を持った生態系の複雑さという科学的な事実に基づく教育でなくてはならないと私は考えています。このような科学的な教育によって、地球上に棲む生物種のかげがえのない大切さを真に理解できるようになるものと思います。21世紀はやはり子供の教育から始まると信じたいものです。そのためには、教育、文化方面の活動が十分な予算によってバックアップされることが大切だと思います。先生方がいきいきと教育活動をする事の出来ない学校には、生き生きとした子供達もいないものと思います。有名な「米百俵物語」との関連で話せば、理科教育センターの教育活動のためにはもっと予算が必要なのではないのでしょうか。学校の先生方の21世紀の教育活動に期待しますし、それを支える地域社会の役割も大切だと思います。

(2001年8月31日)

初収録：

南魚沼のフェアブル「昆虫少年物語」発行記念誌「オオゴマシジミ 迎えて舞う」「昆虫少年物語」発行記念事業実行委員会編